

作品の冒頭、いきなりのアニメ。「超個人的趣味規制法（通称オタ禁法）」によってオタクが排除される近未来の日本。オタク特区として生き残りをかける鷺宮町は果たして政府から生き残ることができるのか！？・・・という壮大な物語の展開を期待させながら実写パートへと入っていく。鷺宮町のPR映画の撮影を任されて東京から帰ってきた主人公。故郷がアニメの聖地となっていることに驚きを隠せず、否定的な感情をもつ。だが、PR映画の撮影を進めていくにつれて、鷺宮がアニメの聖地となったことに対し違った感情が現れはじめる。そして出来上がったPR映画とは・・・？

見終わった感想として最初に感じたのは「あたたかい」ということでした。アットホームな感じですよ。主要キャストを除けばすべての方が鷺宮の方、そしてオール鷺宮ロケ！なんと町長まで出演しています（しかもとても面白い役で）。また、作品中とエンドロールの最中にでてくる町内の方のインタビューはとても印象的でした。みなさん飾らない言葉で話していて鷺宮の日常が伝わってきます。映画の冒頭のアニメーションは私と同じ学生の方たちがつくったもので、こちらアットホームさを醸し出します。

この映画のおもしろさとしては、作品にでてくるグッズや小道具などがあげられます。グッズは実際に販売されているものも多く、特に私が気に入ったのは、「ミニ鳥居型えんぴつ」。本当に鳥居の形をしていて書くこともできるんですね。いつでもどこでも聖地巡礼可能という優れもの。売れ行きは上々のよう。また、作品中の小道具はすごくこっていて、本物の巡礼ノートや絵馬もできます。本当にみなさん絵がうまくてキャラクターが好きなんだということを実感しました。他にも主人公がつくるPR映画の候補としてでてくる作品が実におもしろい！「変神鷺宮高ヒーロー部」、「鷺宮痛車物語」など、これらはこの映画作品のシナリオの候補として一般公募したものからとっているらしいです。皆さんのセンスには脱帽です。

この映画を観る前まで、聖地巡礼のことを実際地元の人たちはどう思っているのだろうと疑問に思っていました。もし私の地元が聖地巡礼の場所になってオタクの人がたくさんきたら否定的な感情をもつかもかもしれません。けれど、鷺宮ではその聖地巡礼が町の活性化につながっていて、町の人々がオタク文化と一緒に生きています。映画の最後のお祭りにでてくるアニメの絵が描かれた神輿を見て、コンテンツツーリズムの在り方というものがわかった気がしました。

平野沙紀（学生・大学1年）